

令和6年度 自己評価表			鳥取県立鳥取聾学校ひまわり分校	
中長期目標 (学校ビジョン)	聴覚障がいのある幼児・児童・生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。	➡ くめざす子ども像 【知】学び合う子 【徳】かなえる子 【体】やりぬく子	今年度の基本方針	1 一人一人のきこえに応じた学びの充実 2 子どもたちが主役となり「わかる」「たのしい」と感じる授業・保育づくり 3 自分のきこえを知る～自立活動の充実 毎日 帯で～ 4 自分のよさを知り、のびす、夢に向かう取り組みの推進 5 からだを動かす楽しさを知り、からだづくりを生活に位置づける ★ 子どもと向き合う時間を充実するための業務改善★
評価基準	A:十分達成81～100% B:概ね達成61～80% C:変化の兆し41～60%⇒経過を分析し、改善方を検討 D:まだ不十分31～40%⇒改善方案が必要 E:目標や方案の見直し30%以下			

評価項目	評価の 評価項目	年 度 当 初			最終評価		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 社会で生き抜く力を身につける	幼稚園部	・友達を誘って、一緒に遊ぶことを楽しむ姿が見られるようになってきた。 ・「伝えたい」気持ちは高まってきたが、「わかりたい」気持ちは、不十分である。	・「できた」「楽しかった」と達成感を感じ、友達とやりとりしながら、楽しく遊んでいる。 ・「伝えたい」「わかりたい」という気持ちを持って楽しいやりとりをしている。	・友達とのかかわりを楽しむ場や遊びを設定する。 ・関わりや友達を意識するやりとりを促す支援について共通理解を図る。 ・手がかり(写真、絵日記等)をもとに、経験を言語化する活動を続けたり、拡充模倣を意識した丁寧な関わりをしたりする。	幼稚園部 ・給食時間に友達に話しかけたり、自由遊びの時に友達を誘って遊んだり等、いろいろな生活面で友達関係が深まってきた。 ・おはなたいも友達の友達を通して、友達同士の関係性が深まり、やりとりを楽しむ姿や友達の話きこうとする姿が見られるようになった。	A	・友達同士の関係性を更に深めるためにも、子ども同士でやりとりが確実にでき、相手が分かるように伝えられる「ことばの力」をつける取り組みを進める。 (文で話をする、筋道を立てて伝える、経験したことを伝える等)
	小学部	・個に応じた指導・支援の工夫に取り組んでいるが、教室環境整備、ICT活用については十分ではない。 ・児童の実態や発達段階には幅がある。	・児童一人一人がわかった、できたと感じる授業づくりを行っている。	・めあての提示、話型の活用、めあてを意識した振り返り等を実践した「わかる・できる・たのしい」授業づくりを進めている。 ・ICT機器の活用、板書の工夫、教室掲示等を含めた視覚的支援を充実する。	小学部 ・児童の実態や学習の在り方に応じて、めあての提示、話型の活用、めあてを意識した振り返りなどを工夫した授業を進めるとともに、児童にとってよりわかりやすい学習になるように、教員同士で連携を取りあった。児童の学ぶ意欲が向上し、「わかった・できた・たのしかった」と振り返る場面が増えてきた。 ・ICT機器を積極的に使用した授業を行ったり、板書や教室掲示等を工夫したりしたことによって、児童が興味関心を持ち、充実した授業を進めることができた。	A	・引き続き、児童の実態把握を進め、めあての提示の仕方、話型の活用、めあてを意識した振り返り、板書の工夫、教室掲示等の改善や工夫を図る。 ・ICT機器を使う機会を今後も増やしていくとともに、児童が操作する機会も増やしていくようにする。
	教育研究・自立活動部	・幼児児童が積極的にコミュニケーションをしようとする気持ちが育ってきている。その反面、伝え方の表現が曖昧なことがあり、分かり合うという面では不十分である。	・「伝えたい」「わかりたい」という意欲を持って、手話や自分なりのことばで積極的にやりとりをし、積極的に自分から思いを伝えたり、相手を理解しようとしていたりしている。	・各学部で幼児児童が「伝えられた喜び」、相手の話が「わかった喜び」が味わえるような環境設定や、ことばの概念を育てていく意図的なかかわりを大切に取り組んでいく。(話型、絵カード、掲示等の言語環境、手話等)	教育研究・自立活動部 ・各学部で意図的な関わりや活動の積み重ね、学習環境を整えたことにより、幼児児童同士が伝え合う姿や、相手に合わせて伝え方を考えて関わろうとする姿が見られるようになった。 ・参観ウィークや一人一研究授業、全体授業研究会の実施により、職員一人一人の聴覚障がい教育への理解を深め、授業改善の意識を高めることができた。	A	・校内研究3年目のまとめとして研究を深めていくとともに、聴覚障がい児への言語指導や教科指導についても取組を進めていく。 ・教職員の専門性の維持、継承や、幼児児童に応じた指導や支援の工夫をするための取り組みを進めていく。 (職員研修の充実、一人一研究授業、参観ウィーク、鳥壺・ひまわりスタンダードのチェック等)
	情報教育部	・幼児・児童の学びが深まるよう、各教師が授業において、タブレット端末やスライドショー等のアプリケーションを有効に活用する機会が増えつつある。ただ、授業において効果的に使い、授業を行う場面は増えているものの、個々の教員による実践には幅がある。ICT支援員による研修が実践に生かされていないかったり、共有できていなかったりする現状がある。	・ICT研修を受け、それを教科指導や校務分掌業務に生かすことができる。	・ICTを活用した授業を行う教職員のスキルが向上するよう、定期的に研修する機会をつくる。ICT支援員を活用した教職員研修、またプログラミング教育につながる研修の機会を設定する。	情報教育部 ・ICT活用や教職員のスキルが向上するよう、夏季休業中に職員対象の夏季研修を設定したり、ICT支援員さん来校時に職員からの相談に対応していただいたりした。職員研修で学んだことを生かし、分掌業務に活用する姿も見られつつある。また、プログラミング学習について、小学部の学習に支援員さんがSTとして支援に入るなどの活用を試み、成果を得ることができた。今年度、職員対象のプログラミング教育研修を設定できなかった。	B	来年度も今年度と同程度のICT支援員さんの入校を予定している。また、今年度同様、研修の機会を設定していく。今年度できなかった職員対象のプログラミング教育研修を設定していく。
2 こうなりたい自分・夢をもつ	幼稚園部	・補聴器や人工内耳の装着や点検等を自分でできるようになってきている。 ・自分のきこえについての自己理解は、これから理解を深めていく必要がある。	・人工内耳や補聴器は自分のきこえを助ける大事なものであることを理解し、身の回りの人に伝えていく。 ・自分のよいところ・好きなところ・得意なことなどを知り、やりたいこと等の興味関心を広げている。	・補聴器や人工内耳の役割や大切な扱い方について話し合う活動を設定する。 ・友達のよいところや自分の好きなこと等を伝え合う活動を設定する。	幼稚園部 ・併行通園や学校間交流園の友達に自分のきこえについて伝えることができた。 ・がんばっていた友達を認め合うことができた。 ・自分で目標を設定し、それに向かって努力しようとする姿が見られた。	A	・併行通園や学校間交流で、きこえや手話について幼児主体の発信が増えるように園と連携をとっていく。 ・きこえにくい自分を意識し、どう行動したら安全に楽しく過ごすことができるか、具体的な行動につなげられるように、自己理解を深める。
	小学部	・友達や他者と関わることを楽しみ、意欲的に活動しているが、自信のない活動には消極的になったり思いを伝えられなかったりすることがある。 ・相手にわかるように伝える、わかろうと思ってく意識が十分に高まっていない。 ・きき違えたり、あいまいに覚えたりしていることばがある。	・自分の良いところを見つけ、自信を持って日々の活動に取り組んでいる。 ・自分には、きき違えたりきき漏らしたりしていることがあることを意識し、確認したり覚え直そうとしていたりしている。	・達成感を味わったり、自他のよさに気づいたりできるように、児童の制作物に感想を書いたり、がんばりを紹介したりする機会を設定する。 ・できたこと、良かったことに対しては常に賞賛し、児童の自己肯定感を高める。 ・「わかる」経験を積めるように、話の内容を確認したり、ことばを指文字等で確認したりする。 ・児童の思いを受け止め、じっくり対話をする時間を設定する。	小学部 ・できたことや良かったことを具体的に伝えて称賛したり、行事や学習で達成感を持たせ、自他のよさに気づくことができるようにしたりしたことによって、自信に繋がりが積極的に活動に向かうことができた。 ・児童と対話をする時間を確保し、話をきく姿勢で考えを引き出すようにしたこと、伝えたいことを最後まで伝えようとすることができた。そのような対話の中できき違えやきき漏れを確認し覚え直そうとすることができた。	A	・今後も、自己肯定感を高められるように、できたことや良かったことを称賛していく。 ・引き続き、対話を大切にし、チャレンジを称賛したり、失敗でもよいことを伝えたりしていく。
	支援部	・話すことや話し方・発音に自信がない、またはことばが分からないなどの理由で、黙ってしまったり自分の思いとは違うことを言ってしまう様子が見られることがある。 ・同じ思いを持つ仲間同士、またその支援者にとって、情報交換や学習する場が不足している。	・躊躇せずに話そうとし、意欲的に「伝えること」を楽しんでいる。 ・情報交換や学習する場を設定すること等で、関わりがつながり、ひろがっている。	・子ども、保護者、その支援者の立場に立った指導や支援を工夫する。 ・手話学習会や難聴学級情報交換会、各種研修会、また連絡帳などを通して安心感のある環境と関係づくりへの土台を作る。 ・人との関わりを広げ、情報交換や知識・経験の習得につながるように、わくわく交流会(西部地区きこえにくい子どもの交流会)、手話学習会、難聴学級情報交換会、学習相談でのグループ活動や発表などの場を設定する。	支援部 ・子どもたちは自分から、声、手話、身振りなどさまざまな手段で積極的にやりとりしたり、思いを伝えたりできるようになった。 ・内容や回数考えた場を設定し、情報を発信することで参加者も増えた。また、教育相談においてもグループ活動を行うことができ、関わりやつながりがひろがることへつながった。	A	・新しく関わる子どもについては、話すことや話し方・発音に自信がない様子が見られるので、積極的にやりとりしたり、思いを伝えたりする気持ちを育てていくよう、引き続き働きかける。 ・関わりやつながりがひろがることへの足がかりとして、内容をさらに吟味してよりよい場の設定を考えていく。
	キャリア教育	・校内掲示やキャリア教育だよりで、最新の就労や進路の情報を伝え、保護者の理解啓発へつなげることができたが、子ども達への発信が十分でない。 ・個別の教育支援計画を活用したり、懇談で子ども達の将来の姿について話題にしたりして、保護者と話し合いを深めている。	・子ども達がきこえない・きこえにくい先輩方の活躍や就労、進路に興味、関心が持っている。 ・懇談で保護者ときこえない・きこえにくい人を取り巻く現状や子ども達の将来の姿について話し合っている。	・子ども達が校内掲示やキャリア教育だよりを意識して見るように工夫し作成する。 ・キャリアパスポートの活用を促す。 ・学期末懇談に保護者と話し合う機会を設定し、話し合いの参考となる資料を提供する。	キャリア教育部 ・就労フェスタでの小学部児童の活動の様子を校内で掲示したり、キャリア教育だよりで紹介したりして、幼児・児童、保護者に発信した。 ・教員がキャリア教育の資料を活用できるように、今までのキャリア教育だより等をファイルにまとめ再発行、周知した。	A	・きこえない・きこえにくい子ども達の将来について、教員が幼児・児童、保護者に発信したり、ともに話し合ったりできるように職員研修の場を設定する。
3 あきらめない体力・気力	幼稚園部	・運動の時間には、いろいろな動きに挑戦し、楽しみながら取り組んでいる。 ・苦手なことにもやってみようとする姿が見られるようになってきている。	・自分なりの目標を持って、いろいろな動きに挑戦している。	・運動の時間に楽しみながら多様な体の動きを経験できるように、引き続き計画的な運動の取組を進める。	幼稚園部 ・運動の時間の様々な活動に対して、自分なりに目標をもち、達成しようと思意欲的に取り組んでいた。その結果、できるようになった自分、がんばった自分を自覚して達成感を味わう様子が見られた。 ・自由遊びでは、学部を越え、自分から進んで小学部の友達の遊びに加わり、サッカーやトッジボール等を楽しむ様子が見られた。	A	・個々のチャレンジ意欲を高める活動内容の工夫や目標設定を行い、達成感が得られるように段階的な取り組みを継続していく。 ・集団遊びの楽しさを実感できるように、交流園や小学部と連携を図る。
	小学部	・からだを動かすことが好きな児童が多いが、自分から意識して体力づくりを行うことは難しい児童もいる。	・体力づくりにおける自分のめあてを持って、意欲的に運動に取り組んでいる。	・自分のからだの使い方について動画等を活用し、客観的に捉え、体力づくりにおけるめあてを考える時間を設定する。 ・体力づくりの時間や体育、休憩時間等に、様々な動きを入れた運動に取り組んでいく。	小学部 ・体力づくりや体育の学習には、めあてを設定して様々な動きを取り入れた活動を行ったり、ICT機器を活用して動きのイメージ作りをしたりした。体の動かし方がスムーズになり、意欲的に運動に取り組むことができた。 ・休憩時間には、サッカー、鬼ごっこ、プランコなどの様々な遊びを楽しむ、意欲的に運動している様子が見られた。	A	・今後も様々な動きを取り入れたり、ICT機器を活用した取り組みを行ったりしていき、児童自身がめあてを持って主体的に活動できる内容を共通理解して進めていく。 ・体力づくりの時間や体育、休憩時間などの取り組みで運動に対して意識が向上したが、長期休業中の体力向上の取り組みについて習慣づけを図ることが今後必要である。
	健康安全教育部	・各学部で休憩時間に中庭で楽しみながらからだを動かしている姿がよく見られる。 ・休憩時間に学部を越えて幼児児童と一緒に中庭で汗をかき楽しむ姿が見られている。 ・元気に過ごすためには、睡眠や食事など規則正しい生活習慣が大切であることを知っているが、実践については課題がある。	・遊びのバリエーションが増え、遊びの中でからだを動かす楽しさや、からだの使い方を知っている。 ・家庭や地域で進んでからだを動かそうとする。 ・健康に必要な生活習慣について知り、規則正しい生活を心がけようとする意識もついている。	・教師が遊びの中でからだの使い方や動きの手法をみせたり、発達年齢にあった遊びの工夫や時間の確保をすいていく。 ・家庭や各学部から、できる遊びやできるようになってほしい遊びについて吸い上げ、新しい遊びとして幼児児童に提案する。 ・生活習慣を振り返る機会(キャンペーン)を設定し、幼児児童の指導に生かしたり、家庭への啓発を図ったりする。 ・長期休業前に特集を組みだ通信等で家庭に呼びかける。	健康安全教育部 ・限られた環境の中で、休憩時間になると身体を動かして遊ぶ姿が多く見られた。遊びも小学部では球技を中心に少しずつ拡がりが見られてきている。 ・すっきりモーニングを通して、時間を意識して生活することができたり、より良い生活習慣について教師に尋ねたりする等の様子が見られるようになった。 ・体幹を強くする運動についての配布文書を作成し、家庭でも運動に取り組めるよう情報発信を行った。	A	・生活時程や環境設定など、幼児児童がより主体的に運動に取り組めるようにするための方策を検討する。 ・次年度も、生活リズムが崩れやすい時期に生活習慣を振り返る機会を設定したり、家庭への情報発信をしたりする。 ・引き続き、家庭でできる運動や運動習慣の定着等についての情報発信をしていく。
	推進業務改善	の達成率 ①達成率 ②削減率 ③業務改善率 ④効果率	・昨年度、時間外勤務時間が年間360時間を超えた教職員は3名だった。月45時間を超えるのは、年度初めや年度末に集中している。 ・年度初めに分掌表を一部新しくして、運営を行っている。	・一人一人の働き方の意識が高まり、時間外勤務時間が月45時間、年間360時間を超える教職員が解消する。 ・各学部や分掌で業務内容を再確認して、業務の分担に偏りがないよう人員配置を整え、企画部会等で定期的に調整する。 ・引き続き各取組のねらいを十分に共通理解して内容を検討し、企画運営を進め、業務のスリム化を図る。	・時間外勤務時間の振り返りや日々の声かけ、「帰らぬDAY」の設定などを通して、教職員の働き方への意識が高まった。5月以降、月45時間を超えた時間外勤務者は0名で、年間360時間を超えたのは1名にとどまっている。 ・年間を通して、ねらいや役割分担、方法の確認をしながら業務の精選や効率化を図ってきた。アンケート集計等でのICT活用も進み、業務のスリム化や時間短縮につながっている。	B	・校内資源(各種教材・パソコン内の各種データ等)を集約・整理して所在を明確にすることで、業務の効率化・時間短縮を図る。 ・各学部の行事を見直し、ねらいや内容について継続、方法の変更、削減の検討をして、企画運営に当たら。